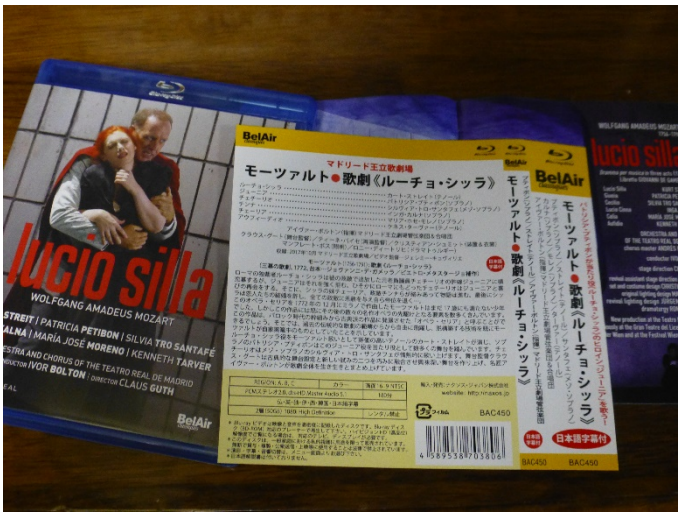
モーツァルト巡礼ーその６

K.518 水谷 康男

この「モーツァルト巡礼」も第6回目に入ります。前々回の途中から前回までは、モーツァルトの交響曲の世界へ寄り道してしまいましたが、その後「モーツァルトのシンフォニー」全2巻（廃刊）の大作を知り、高額の出費で手に入れました。この巡礼には書きませんが、すごい著作に巡り合えた幸せを噛みしめました。

さて、ケッヘル番号順にたどる巡礼に戻ります。**K135 は、3 幕の音楽劇「ルーチョ・シッラ」**。序曲も含め3時間半に及ぶ2作目のオペラセリアで、1972 年の秋から末にかけて作曲され、同年 12 月 26 日、ミラノの大公宮廷劇場で、モーツァルトの指揮で初演され、シーズン中に26回も上演されました（=大好評）。手元のCD全集では、王立モネ歌劇場によるシルヴァン・カンブルランの指揮による 1985 年のライブ演奏録音で、とても滑らかな演奏です。画像で観たくもあり、YouTube で検索しましたが、残念ながら一つもありませんでしたが、ちょうど 40 年前の FM放送の録音（吉田秀和の「モーツァルト：その音楽と生涯」第 52 回～57 回：「ルーチョ・シッラ」が、画面ではその内容のまとめまでついています。）を聴くことができました。さらに画像を探して、ブルーレイディスクで日本語字幕のついているものを発見、即、発注。2017 年 10 月マドリード王立劇場のライブ録画です。CDで聴くよりは、映像（しかも日本語字幕付き）で視聴する方が、数倍も楽しめます。これがまだ 10 代のモーツァルトの作品とは信じられぬほど、聴きごたえがあります。



続く **K136～K138 の3つのディヴェルティメント**は K135 より前の1972年初めに作曲されています。

ディヴェルティメント ニ長調 K136(125a)
ディヴェルティメント 変ロ長調 K137(125b)
ディヴェルティメント ヘ長調 K138(125c)

それぞれ 10 分程の弦 4 部（第 1・第 2 ヴァイオリン、ヴィオラ、バス）の編成で、弦楽合奏や弦楽四重奏などで、その推進力溢れる内容に、いろいろな機会で演奏される機会も多いです。特にニ長調は、斎藤秀雄の教えの中で一番の曲として知られ、小澤征爾の指揮で、機会があるたびに演奏されています。また、ウィーンフィルメンバーの室内楽（弦楽四重奏など）でも何回も聴く機会があるほど、地元の演奏家には定番の作品ではないでしょうか。

K139 は、ミサ・ソレムニス「孤児院ミサ」。1772 年にザルツブルクで作曲されたとされていましたが、現在の研究では 1768 年 12 月ウィーンで初演されたものと考えられています。ソプラノ、アルト、テノール、バスの独唱4場部と4声部の合唱に、オーボエ、トランペット、トロンボーン、ティンパニと弦5部（ヴァイオリン2部、ヴィオラ2部、バス（チェロ、コントラバス））、オルガンという編成の 40 分に及ぶ大曲です。ヴィオラ2部という編成はザルツブルクでは行われず、また自筆譜がウィーン製の紙に書かれているなど、今ではウィーンで作曲されたものと考えられています。

K140 は、ミサ・プレヴィス ト長調ですが、オリジナルの草稿類が残っていないので、偽作との説のありましたが、モーツァルトの筆跡による写本への書き込みが発見されたりして、ベーレンライターの新全集では、正式に収録されています。キリエ、グローリア、クレド、サンクトゥス、ベネディクトゥス、アニュス・デイの6部よりなりますが、全体で 20 分足らずの佳曲です。

K141 は、テ・デウム「おん身神を」という 4 つの部分よりなる7分程度の小品です。

K142 は、タントゥム・エルゴ 変ロ長調 「それゆえ、これほどの秘跡を」という意味の聖体降福式のためのモテットで、単に「大いなる秘跡」と呼ばれることが多いのですが、アインシュタインにより疑作とされ、この全集にも収録されていません。

K143 は 1770 年 2 月にミラノで 2 人の少年カストラートのために作曲された、**レシタティーフとアリア「故に重要なのは・高きを求め」**で、6 分ほどの曲です。

K144 と K145 は、K67～K69 と同じ形式の数分の教会ソナタと呼ばれる、オルガンと小さなオーケストラという編成で、ザルツブルクのドームのミサで演奏するために作曲されたものです。**K144 が、第 4 番ニ長調、K145 が第 5 番ヘ長調**でいずれも 1772 年にザルツブルクで作曲されました。

K146 はソプラノ独唱のアリア「来たれ、恥知らぬ罪人ら」で、1779 年 3 月か 4 月にザルツブルクで作曲されたといわれています。

K147 は、「何と不幸な私」というソプラノのための歌曲で、1772 年ザルツブルクでの作品です。1 分足らずのまさに佳曲です。

K148 は、「晴れのヨハニスロージェ賛歌」という、バス/バリトンのための歌曲で、同じく 1772 年ザルツブルクでの作品です。

K149、K150、K151 は同じく 1772 年ザルツブルクでの作品とされていましたが、今で父レオポルドの作品とされて新全集では除外されており、このCD全集にも収録されていません。

K152 は、「静けさは微笑み」というカンツォネッタで、果たしてモーツァルトの作かという疑いもあり、新全集では付録として巻末に収録されています。しかし一聴して、聞き覚えのある曲で、モーツァルトの作品として（モーツァルト歌曲集として）音盤もいくつか出ています。

K153 と K154 はピアノのためのフーガ 変ホ長調 と ニ長調 で、いずれも未完成で、このCD全集にも収録されておりません。

K155（第 2 番） ～ K160（第 7 番）までの 6 曲の弦楽四重奏曲は、ミラノ四重奏曲と呼ばれるように、モーツァルトの 3 回目のミラノ旅行の間、1772 年から 73 年にかけて作曲されたものです。これら 6 曲は、いずれも 3 楽章で書かれており、特に第 2 楽章は 6 曲のうち 4 曲が短調で書かれており、哀愁すら感じさせる充実した作品です。全体に 9～13 分程度の簡潔な仕上がりとなっています。

K155 は 弦楽四重奏曲 第 2 番 ニ長調
K156 は 弦楽四重奏曲 第 3 番 ト長調
K157 は 弦楽四重奏曲 第 4 番 ハ長調
K158 は 弦楽四重奏曲 第 5 番 ヘ長調
K159 は 弦楽四重奏曲 第 6 番 変ロ長調
K160 は 弦楽四重奏曲 第 7 番 変ホ長調

K161～K163 は交響曲で、すでに前号と前々号で触れていますので省略します。

K164 は 6 つのメヌエットで、1772 年 6 月頃にザルツブルクで作曲されました。6 曲とも 2 分ほどの小曲です。

K165 はモテット「踊れ、喜べ、幸いなる魂よ」ヘ長調です。1773 年 1 月にミラノで、「ルーチョ・シッラ」の主役を演じたカストラートのラウツィーニのために作曲され、当地の修道参事会教会で初演されたものです。特に第3楽章アレルヤは誰もが聴いたことのあるソプラノが歌う有名な旋律です。

K166 はディヴェルティメント 第3番 変ホ長調です。オーボエ、クラリネット、イングリッシュ・ホルン、ホルン、ファゴット各 2 本という管楽器 10 本のみの編成で、1773 年 3 月 24 日にザルツブルクで作曲されました。全 5 楽章で 12 分程の演奏時間です。

K167 は、三位一体主日ミサ ハ長調 です。演奏時間 30 分余りのそれなりの規模の作品です。1773 年 3 月にザルツブルクで作曲されました。楽器編成は、オーボエ・トランペット各2、ティンパニ、ヴァイオリン2部、チェロ・バス・オルガンと 4 声部の合唱が伴い大規模な音楽となっていますが、独唱は全くありません。キリエ、グローリア、クレド、サンクトゥス、ベネディクトゥス、アニュス・デイの 6 部からなります。

K168（第8番）～ K173（第13番）の6曲の弦楽四重奏曲は、「ウィーン四重奏曲」と呼ばれ、1773 年 7 月から 9 月までに訪れたウィーンで作曲されています。「ミラノ四重奏曲」から半年の隔たりしかありませんが、その作風には大きな転換があります。「ミラノ四重奏曲」が、すべて 3 楽章よりなるイタリア的な作品だったのに対し、ここではメヌエットの楽章を定着させて、4 楽章制を取っています。ウィーンで、ハイドンの影響を受け、ウィーン的で、闘争的な重厚で対位法的な傾向を示しています。

K168 は 弦楽四重奏曲 第8番 ヘ長調
K169 は 弦楽四重奏曲 第9番 イ長調
K170 は 弦楽四重奏曲 第10番 ハ長調
K171 は 弦楽四重奏曲 第11番 変ホ長調
K172 は 弦楽四重奏曲 第12番 変ロ長調
K173 は 弦楽四重奏曲 第13番 ニ短調

いずれの曲を聴いても、「ミラノ四重奏曲」と較べて、格段の成長を感じることができ、本人の才能にウィーンという環境が導火線となってこの素晴らしい「ウィーン四重奏曲」へと進化したのでしょう。そして、モーツァルトの弦楽四重奏曲では、10 年後の「ハイドン四重奏曲」という傑作の森へと昇華していくのです。
第 12 番までは、すべて長調でしたが、第 13 番は、弦楽四重奏曲としては、最初の短調作品であり、ひときわ重厚な作品で、聴いていて、心が震えます。この全集では、ドイツのソナーレ弦楽四重奏団が演奏していますが、録音が素晴らしいだけでなく、ヴィオラを小林秀子が演奏しているところに一層の感慨を覚えます。（小林秀子は、マンハイム音楽大学教授で、ドイツビオラ協会会長、サイトウキネン・オーケストラのメンバーとしても 1991 年より毎年参加）

K174 は弦楽五重奏曲 第1番 変ロ長調 です。モーツァルトの弦楽五重奏曲の編成は、いずれもヴァイオリンとヴィオラ各 2 とチェロという編成で、内声部の充実がその大きな特徴だと思います。その最初の作品で、モーツァルト会心の曲と自負していたようです。特に第 3 楽章メヌエットは、全然別のものに入れ替え、第 4 楽章アレグロも多くの訂正を行ったほどです。このCDでは、第 3, 4 楽章の初稿を別に録音して、その差を比較できるようになっています。

K175 は、ピアノ協奏曲 第5番 ニ長調 です。1773 年 12 月にザルツブルクで作曲されたもので、モーツァルトの本格的なピアノ協奏曲としては最初の作品となります。オーボエ、ホルン、トランペット各 2、ティンパニ、弦 5 部という編成からも、モーツァルトのこの曲にかける意欲が伝わってきます。

（続く）